

私の風景の日常性と地域景観認識モデル

佐々木 葉

正会員 博士（工学）早稲田大学創造理工学部社会環境工学科
〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1 E-mail:yoh@waseda.jp

景観計画が対象とする地域の景観の議論においては、住民の地域景観認識の把握が不可欠である。本稿では、集団表象などの共有された景観イメージではなく、私の風景の生成のプロセスに着目した地域景観認識モデルを既往の風景論をもとに提示し、このモデルに照らして地域景観を論じることの意義と必要性、合わせて今後の景観研究の課題について考察した。

キーワード: 景観計画, 地域景観, 景観モデル, 景観まちづくり, 日常

1. 景観まちづくりにおける予定調和

景観計画の策定やより広く景観まちづくりと呼ばれる努力は、各地でまだまだ続いている。そのためにはまず地域住民の景観認識の把握が必要となる。地域の人々は自らの地域に対してどのようなイメージを持っているのか、何を大切と感じ、何が問題であると感じているのか。それを探るところからはじめよう。住民参加のまちづくりという方法論の面からもごく自然なアプローチである。そのためワークショップを行い、まちあるきをして、地図に景観資源や課題をかきこむ。あるいはカメラをもって自由に撮影した写真にコメントを付していく。実践の場ではこうした手法が一般化している。私自身もよく行う。研究レベルでも住民の地域認識に関する研究蓄積がある。現状における認識の把握や環境変化の影響、住民の属性による違いなどを探ろうとする研究ももちろん行われている。そうした膨大な努力の成果を眺めていると、いささか気になる点が出てくる。

まちづくりの現場では、やたらと和気あいあいとした雰囲気の中で、ここの神社が、あそこの緑が、いろいろな要素が指摘されるのだから、何となく予定調和的な感じがするのである。これが有名だからという感じで分かりやすい施設が自動応答のように景観資源と指摘されることも少なくない。もちろんあらたな発見や気づきに目から鱗が落ちることもある。しかしそれが納得されるという意味においては、あるべき景観秩序の枠の中と言えなくもない。もう一つはワークショップに参加するのはたいていが中高年の人たちで、ヤンママみたいな人々や思春期の中高校生などの意見はなかなか聞けない。

研究成果の中にも、気になる指摘が見いだせる。例えば卓越した景観を有してはいない地域において住民の日

常生活に基づいた景観特性を明らかにしようとした森信らの研究¹⁾では、地域固有の景観構成要素や特性が住民の景観認識には十分結びついていないことが明らかになった、とされている。他にも、本来こういう景観は価値があると思われるのだが気づかれていない、と研究者が指摘する例はある。私自身も言うことがある。外からの目、専門家としての観点から、地域景観の価値の再編を促すことが、むろん押し付けではなく、我々の仕事でもある。しかしその価値とは、ある種の予定調和に基づいているようでもあり、その担保も絶対ではない。

さて、以上のような地域住民の景観認識をさぐる過程のなかで浮上する、確かにそうであるけれど本当にそれで（それだけで）よいのか、あるいはそうだとしたらそれでうまく行くのか、という違和感と疑問。それを出発点にして今回は地域景観とはなにか、その研究はどうすればよいか、ということを考えてみよう。なお、今年の景観・デザイン研究発表会にて「地域景観の議論のためのメモランダム」²⁾を提示し、そこで地域景観の議論はおよそ4つに大別できるとした(図-1)。今回はそのうちの主体に近いほうの二つにフォーカスするものである。

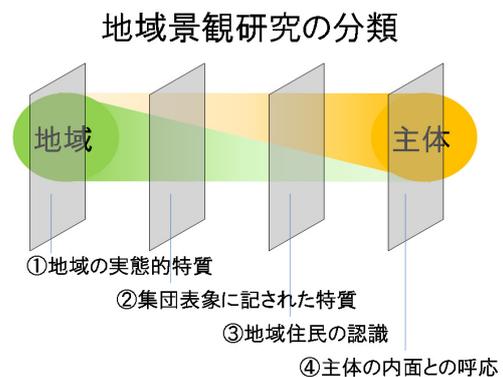


図-1 地域景観研究の分類

2. 本稿の目的と構成

改めて今回の目的とそのための本稿の構成について述べておこう。目的は、①地域景観認識の構造を、主体の風景生成という観点から整理し、地域景観認識モデルを作業仮説的に提示すること、②それをもとにして、現代社会の特質をふまえた地域景観の意義を考えること、③さらにそのためにはどのような景観研究を進めていけばよいかを考えること、である。言いかえれば、景観や風景体験によってつくられる地域イメージや景観イメージという度々言及される興味対象の概念を今一度整理し、その整理に基づくならば、景観まちづくりや研究のスタンスにどのような新しい切り口が展開できるのかを考えよう、というものだ。そのために、風景の認識や生成に関する哲学的論考を参照して、できるだけ分かりやすいモデルにまとめる(3章)。ついで現代の特質を想定しながら地域景観の議論の着目点とその意義を考える(4章)。最後に今後の景観研究の課題について備忘録的に示す(5章)。

3. 地域景観認識モデル

これから述べようとするのは、「人が地域の風景をどのようにとらえていくのか」のモデル化である。従って、地域風景生成モデル、という呼称のほうがよいかもしれない。しかし、曲がりなりにも実学としての土木工学分野における景観研究の流れを汲む者として、篠原先生の「景観把握モデル」³⁾に敬意を表さない訳にはいかない。私たちは景観や風景を通してよりよい地域、まち、暮らしを計画し、デザインすることをミッションとして背負っている。もちろん哲学も地理学も人のよりよき生に資することを考えていると思う。だからその人たちの論考を参照させてもらいつつ、あえて実学術界の戦場になじむ言葉を選んだ。とは言うものの、そもそもどうやってもフワフワとした概念的な話になってしまうのだから、せめて名前ぐらいはすこし学術的な響きに、という程度のことである。

具体的には、木岡伸夫「風景の論理-沈黙から語りへ」⁴⁾、沢田允茂「認識の風景」⁵⁾という哲学者による風景についての論考と、吉村晶子さんの景観原論に関する一連の論文⁶⁾⁷⁾を中心にして、地域景観認識、あるいは地域イメージの捉え方とそのために必要ないくつかの概念を整理していきたい。ここで先に結論を言ってしまうと、「地域景観認識やイメージというものは、すでに人の頭のなかから出来上がったものとしてあるのではなく、頭の中にある様々な素材をつかってその都度つくられる

ものだ」ということである。言うなれば、ケビン・リンチのいうイメージマップのようなものがすでに頭の中にあってそれを思い出して手が紙に描いたり語ったりするのはなく、なにかの拍子に(例えば質問されたり、迷ったりしたとき)人はその都度組み立て、つくりあげるもの、そんな風に考えよう、そしてその素材と組み立てという一連のプロセスに着目して、地域景観にアプローチしてみよう、ということだ。

(1) 環境から風景への段階的移行

風景は発見されるもの。景観を学ぶ人であれば誰もがこうした捉え方を基本とする。環境があるとき主体によって発見され、風景となる。オギュスタン・ベルクが随所に書いていることだ⁸⁾。しかし、考えてみれば、環境としてそこにあったものが、「発見」によっていきなり風景になる、というのはずいぶんと乱暴な話である。ベルク自身もこれについては少し言いわけのような補足をしており、発見にいたるまでに元風景(proto-paysage)という概念を示し、これは「人間と環境の間に必然的に存在する視覚的な関係」⁸⁾(p.16)をいう^{補注1)}。ベルクの景観論、風土論に触発されて哲学的課題として風景を論じようとした木岡は、さらに風景を多段階に区分して、その移行によって風景が立ち上がってくる過程とその意味を論じている。図-2に示すように、原型(x)、基本風景、原風景、表現的風景といったピラミッド状の構造である。それぞれについては後述するが、風景として発見される以前の状態から表現的風景まで、主体が環境を視覚的に認識する過程をより詳細に記述しようとした試みといえる。また沢田は知覚の風景とイメージの風景とを提示し、その接続は多段階であるという。つまり、風景という認識は、いきなり確定するものではなく、何となくからはっきりまで、多段階にとらえる必要があるものである。

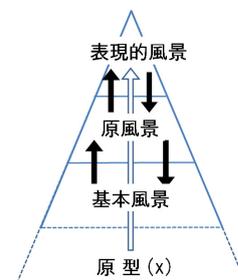


図-2 木岡による風景の階層構造 4) p.179

(2) 木岡の風景論

木岡の狙いは、歴史や文化さらに個人にも大きく依存す

る、それ故にこれまで哲学の対象とされてこなかった風景を哲学的課題とし、その概念規定を哲学の論のなかで厳密に行っていこう、というものである。故に図-2 に示した構造的連関的な風景の概念整理だけを取り出して参照するのは適切ではないが、作業仮説として地域住民が自ら生きる環境が風景化されていくプロセスを考えるために参照しよう。なお、以降の表現は佐々木の解釈による。

まず原型(x)というのは、ベルクのいう元風景にほぼ対応し、次の基本風景を支えるために潜んでいる人と環境の関係構築エネルギーの素のようなものである。もちろん直接それをとらえることはできない。次いで基本風景とは、日常生活のなかで何となく見ているものである。はっきりと意識されてはいないが感じる眺めや外界の印象、多分、クオリアを伴った視覚的アウェアネス状態¹⁰のようなものであろうと思われる。日常に密接に寄り添った何気ない眺めや全感的な感じとも言えよう。こうした基本風景が、語りという言葉をとまなうことで意識に昇り、具体的な風景になったものが、原風景である。なお木岡の原風景は、幼少期に形成される個人のよりどころという意味で通常使われる原風景よりもより広い意味で使われている。尋ねられれば答えられ、そのために他者とも共有ができる風景である。最後の表現的風景は、原風景に対してさらにある意思をもってそれを描き、表現した結果としての風景である。

なお、これらの風景の各段階は、図-2 の上下二方向の矢印に表現されているように、相互に行き来する。これは、風景の発見モデル⁷として吉村さんがまとめている風景の体験、表現、型と展開し、その型がまた体験の仕方に影響を与えるという循環的サイクルと同じ関係ととらえてよいだろう。ただ木岡の風景概念で注目すべきは、風景となる以前の段階において、ベルクの元風景にさらに基本風景を付け加えたところである。

(3) 沢田の認識の風景

次に時代は少しさかのぼり 1975 年の沢田允茂による「認識の風景」を見てみよう。この著作においては、人が環境との関わりのなかで如何に生きるか、日常のくらしの安定性と風景の関係は、という問題提起が根底にある。それは、高度成長期という劇的な環境変化のなかで重ねられた思索であるためであろう。なお 1990 年代の木岡の議論の出発点にも環境倫理学への期待と失望があった。つまり沢田はそれまできわめて長期間安定していた環境が近代化によって破壊されていく場面に、木岡は近代への批判と社会がポストモダン化していく場面に、それぞれ立ち会っていた。このことと両者の風景論のス

ダンスの関係を丁寧に考察することは興味深い議論になりそうである。機をあらためたい。

さて沢田は知覚の風景とイメージの風景という二層を提示している。また、風景を「常にある限られた範囲の全体」ととらえ、世界あるいは環境という主体をとりまく全体像を認識する窓のようなイメージで風景をとらえているように感じる。窓の中にはある風景がその全貌を見せてくれるが、窓から見えているのは外界の一部である。従っていくつもの窓からの風景を自分のなかで構成することによって世界を認識しようとする。そのときにどのような窓自体、および窓の組み合わせが世界と自分との関係を安定化させてくれるのか。このようなアナロジーはどこにも書かれていないが、私はそのような解釈をした。その延長でいえば、窓の中の眺めが知覚の風景であり、複数の窓の眺めを重ねてとらえた外界の風景がイメージの風景となる。そして、知覚の風景は木岡の基本風景に、イメージの風景は同じく原風景と表現風景に対応しよう。

(4) 吉村の原風景の生成モデル

吉村晶子さんによる風景原論に関する一連の研究は、いずれも示唆に富むが、ここでは原風景の成立メカニズム⁶を参照したい^{補註②}。ある環境のもとで通常幼少期に様々な体験が繰り返されて身体化したり、あるいは他との比較といった意識付けのきっかけをもたないまま断片的に蓄積されることで原風景の素材ともよべるものが形成される。それが環境の変化などの刺激となるきっかけを得て、一気に一連の風景へと束ねられ、それを自覚することで現在の自分と対照させながら、自分の原点、よりどころとを感じる原風景になる。このプロセスにおいては、その時点では風景と認識されていない経験の蓄積が木岡の基本風景に相当し、それらを統合して風景のイメージとなったものが木岡の原風景、そしてさらにそれを自分にとって大切だと認識し価値付けたものが同じく表現的風景に相当すると解釈できる。ここで注目したいのは、原風景のもとが蓄積時には意識化されていない、また複数あること、である。

(5) 地域景観認識モデル

以上の参照を経て、地域を生きる住民が自らの地域の景観を認識するというところを、できるだけ簡略にモデル化したものを図-3 に示す。なお図中には、これまで参照してきた既存の論考における風景概念を対応させた。

まず地域における様々な日常的行動の過程で、さまざまな印象や記憶がストックされる。これは木岡の基本風

景にほぼ該当し、眺めや行為の記憶の集積として個々人それぞれに蓄積されると考えられ、これを地域体験記憶^{補注③}と呼ぶことにする。

次いで何らかのきっかけのもとに、ストックされていた地域体験記憶からいずれかがピックアップされ関係づけられる。その関係性をもったまとまりを、地域の景観イメージとする^{補注④}。それはある場所のつながりとしての空間構造的なものであったり、場所での思いやエピソード的なものであったりするだろうが、いずれもひとつつながり、ひとまとまりの関係性に支えられているものと考えられ、その時々生成される。それはあたかも私たちの言葉が、その都度ボキャブラリーを選びある程度の枠となる文法のもとで関係づけられて語りとなるのであって、予め仕込まれていた定型文章が再生されるのではないのと同じだと考えられる。景観イメージの生成においては、言葉の補助を得ることが多いが、何となく次々と視覚的な素材が浮かび、つながって一つの新たなイメージとなる場合もある。またその生成のされ方は、きっかけや目的に応じて多様であるが、ある程度の傾向やパターンもあると予想される。

こうした地域景観イメージの生成履歴を重ねる中で、お気に入りやなじみ、役に立つ特定の体験記憶やイメージが現れ、それには他と差別化されたラベルが与えられて自身のなかに登録される。意識化と登録の過程は、言葉の力をかりるため、他者との対話（直接的でも間接的でも）のなかで進むこととなるが、基本的には個人の中での意識化と登録と考え、これ自体をすぐさま集団表象とはみなさない。そうして登録されたイメージが明確な景観は、意識化の過程はもちろんのこと、行動自体にも

フィードバックされる力をもった地域景観イメージの代表景観と考える。

以上のような一連のプロセスを地域景観認識モデルと考える^{補注⑤}。

4. 地域景観認識の重要性と課題

(1) 着眼点

さて、問題はここからである。図-3 に示したモデルには、特段新しい点はない。風景の発見や生成は、体験、表現、記述というサイクルであるという既にある説と大して変わらない。しかし、このモデルを作業仮説として用いたことによって、地域景観を考えるためには、一人一人に蓄積されている行為や眺めの記憶、つまり風景のタネがどうなっているか、それがどのように組み立てられるか、この二つの側面に着目することが必要、ということが分かる。

例えば、景観まちづくりでおなじみのまちあるき等では、よい景観・わるい景観、好き・嫌い、気になるなどの指向性を予め提示してそれに適合するものを住民に指摘してもらうことがあるが、そこで抽出されたものは、地域景観認識モデルに照らしてどう位置づけられるかを吟味する、いうことである。住民一人一人に登録された景観は指摘されやすいが、その場合もどのようなプロセスを経て登録に至った景観であるのか。場合によっては特段自分の行動と関わらないが有名だから、単によく使うから、ということもある。一方、その特徴をはっきりと表現できない何気ないものが、自らの行動に根ざした生きられた根につながる景観イメージの一端であるかもしれない。冒頭にのべた景観まちづくりの予定調和の違和感を深く探るには、この地域景観認識モデルが一つのヒントとなるのではないか。

何れにしても、注目すべきは、風景のタネとなる地域体験記憶のストック状態とそれを景観イメージへと紡ぎだす段階という、これまであまり研究対象とされてこなかった部分であると考えられる。以下では、こうした点に注目することの意味を先に参照した論考から確認することで、地域景観論の現代的な意義を問題提起的に確認して

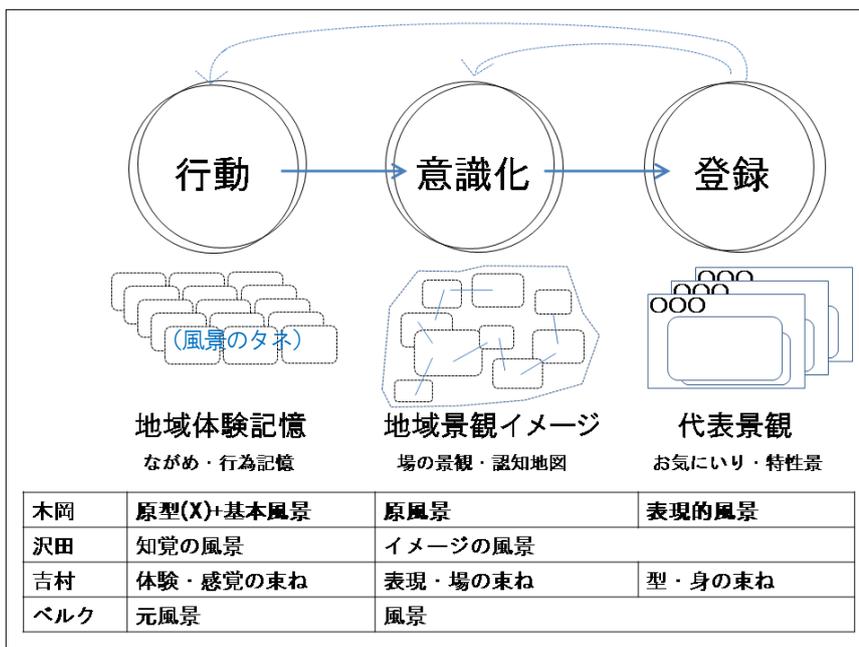


図-3 地域景観認識モデルと既往の知見の対応

おきたい。

(2) 私の風景を支えるものとその日常性

地域体験記憶とモデル上で位置づけているものは、木岡による基本風景、沢田による知覚の風景である。まず、両者がなぜこのレベルの風景にこだわっているのか、どのようにそれを位置づけているのかを、大づかみに確認しよう。まず沢田は、そもそも風景について、以下のよう

に述べている。
「私は**私の風景的環境**をもって（知覚して）おり、そしてその中で**生きている**。」⁵⁾(p. 31) (文字強調は原文のまま)
沢田の論考は、私の生存そのものであるかのような「私の風景」とはどのような存在であるかを論じるために、知覚の風景、イメージといった段階を設定し、それが構成されていく仕方について論じている。つまり、ア prioriに存在する文化の表象としての風景ではなく、私が生きているというその実感である「私の風景」を論じるために、こうしたプロセスを提示したと考えられる。

また木岡は、基本風景について、
「基本風景の根本性格は、最も日常的な生の次元において〈生きられる〉風景であるという点にある。」⁴⁾
(p. 101)
としている。これまで着眼されることの多かった美や崇高といった価値から風景に迫るのではなく、最も身近であたり前で、個人によって異なるものとしての風景に迫るためには、基本風景に着目することが必須であったと考えている。

つまり、どちらも、「環境の中で生きている私」という存在を深く掘り下げるための風景論であり、それを考えるには、この曖昧でとらえづらく、個別的な次元を持ち出さなければならなかったといえよう。

次に、このような「私の風景」にとって重要なことは、日常性や安定性である、と考えられている点も共通する。沢田は、私が生きている日常生活というものには普遍的特徴や内容があるはずがない、それ故何らかの特徴から日常生活を論じようとしても無理であり、日常生活と呼ばれる根拠、則ち環境の風景の安定性に着目する必要があるとする⁵⁾(p. 191) 補注⑥。風景の安定とは、単に物理的な状態が変わらないということではなく、知覚の風景をイメージに構成していくその仕方が身に付いて安定していること、またそのような仕方を身につけさせることができるような環境であることを沢田は考えているのだと思う(主に3章) 補注⑦。

木岡の基本風景の日常性について著者の理解を述べるならば、日常の安定には習慣化した身体の動きを伴うことが重要であり、そこで得られる決して美しくも特別で

もない曖昧な習慣化した体験記憶は、断片的・瞬間的な知覚ではなく私が生きている世界の全体的了解につながっているものである。それ故基本風景を風景のタネとして位置づけることが重要であり、さらにはこれを基本として意識化したり、表現することができる⁴⁾(p. 101)。

以上を概括するならば、個人個人の日常の行動の繰り返しにもなって蓄積される体験記憶は、共有可能で明示的な価値(美しいなど)から意識化されることはない個別で曖昧なものであるが、行動というリアルで身体性を伴う体験から蓄積されるため、細切れにならず、地に足がついた地域景観イメージの土壌となりえる。

(3) 地域景観への問題提起

あまりに乱暴な展開ではあるが、以上より、地域景観認識モデルのもとで地域景観の議論をすることのポイントは、「私の風景」を考えること、およびその日常性と安定性を考えること、であると考える。このことの意義を以下で考えてみたい。

まずは「私の風景」を考えることについて。景観計画や景観まちづくりでは、地域において共有可能な景観の目標を描くことが、暗黙の前提にある。そもそも景観の議論が注目されるのは、地域の景観がバラバラになり、調和が崩れている現状を問題視しているためである。従って全体の調和、共通のルールや方向性を目指すことは必然であろう。そのため、多くの住民が指摘するもの、共感を得られるもの、地形や歴史的経緯という根拠のあるものを如何にあぶりだしていくかが課題となっている。そうした現状において、「私の風景」しかも私にとってすらあいまいな風景のタネのようなものに着目する意味はあるのだろうか。それは、現代というかつての集団表象のような共有可能な風景を成立させる基盤がほぼ崩壊した状況において新たな共有可能な何かを探るためには、一度深く個人である私に潜る必要がある、という理由において意味があると考えられる。

次に私の風景の日常性と安定性を考えることについて。これは風景生成の主体であり、まちづくりの実践の主体である一人ひとりを支えるために必要であると考えられる。

「ここはどこ、私は誰」というフレーズが現代を生きる人々の不安を象徴するものとして頻繁に使われている。私はここにいる、という場への個人の投錨を担保するには、その人の生きる風景が自己の生活として安定していることは、重要な条件となろう。ソーシャルキャピタルや地域愛着の醸成を語るにしても、地域主体の原単位ともいえる「私」が地域の「日常生活」を「生きる」ことすなわち、「私の日常風景生成」に着目することは意義あるアプローチと考えられる。

このように考えた場合、景観計画や景観まちづくりの議論においては、比較的容易に把握しやすい言語化された景観やシンボルの抽出や保全・創造以上に、個人的で日常的な風景のタネとそれを蓄積する行動に注目することが、現代においては重要な課題と考えられる。

5. 地域景観研究の課題

「私」をめぐる論考や、「私」の安定への処方、それぞれ哲学や精神医療の直接的課題である。それ故に本稿でも哲学者による風景論を参照した。その延長でより厳密な地域景観認識論を構築することは他に譲り、私たちが直面している景観まちづくりの実践の場面に即した研究アプローチにおける課題を本稿のまとめとして以下に列記しておきたい。

(1) 風景のタネの実態を把握するには

地域景観イメージとして意識化される以前の地域体験記憶、風景のタネをデータとしてどのように把握するのか、またその分析は如何に。まずはこれが課題である。住民の参加を得たワークショップは、本来はこのようなレベルのタネをすくい上げることを目的としてよい。しかし現実問題として立ち上がるのは、ワークショップの運営ではなく、参加者の片寄りである。一概には言えないが、その年齢や態度からすでにある程度安定した風景のタネの蓄積をもった人が現状ではワークショップの参加者となっている。今一番注目すべきは、変容する地域社会における様々な主体が、どのような風景のタネを有しているのか、あるは有していないか、その実態把握である^{補註⑧}。

そのために自己の日常をリアルタイムで発信するツイッターやソーシャルメディア上のデータを活用する、あるいはプローブパーソン調査による直接的な行動自体の詳細データ等を風景のタネのさらに素と位置付けて把握する、といったことも考えられる。技術的にそれは可能であるが、ここで疑問となるのは、それが風景のタネになるものなのか、あるいは永遠にタネのままで発芽しない、つまり意識化されずに終わる、他とつながらないのかなどについての判断である。発芽率とさらには発芽後の成長実績のフォローも含めたデータはどのようにとれるのだろうか。

(2) 地域景観イメージが生成される場面をつかむには

地域体験記憶が何らかのきっかけで意識化され、景観

イメージとなる、その生成の場面をしっかりとつかむ方法はあるだろうか。たとえばクオリアが志向性であるところのポイントと重なって意識化されるという脳科学の知見は、ひとつの示唆を与えてくれた¹⁰。しかし、それはシーン景観レベルの話であり、より複合的で意味の連関も一体化した地域景観イメージの実情（パターンや特徴）を教えてくれる武器にはまだならない。あるいは精神障害治療の立場からの記憶について考察¹²もヒントにはなるが、具体の地域景観の要素や状態へ対応付けるには、どのような実験や調査をすればよいのだろうか。オーラルヒストリーや様々な語りを対象とした研究例を参照しつつ、より動的な状態をつかむことが課題である。

6. おわりに

「私の風景」という言葉は、正直なところ好きではない。なぜかを改めて考えてみれば、私にとって私はあまりにあたり前の存在で、日常的であるから、改めてカッコに入れて「私」を考えることは、なんとなくわざとらしいと思ってしまうからだ。しかし、それは私が極めて安定して豊かな風景に投錨されているためであり、そのこと自体、実は普通ではないのかもしれない。私の想像をはるかに超えて、人々は「私の風景」の安定を欠いているのかもしれない。その結果が、「私」へのこだわり、「日常」へのこだわりの頻出と急ぎ立てられるような意識化・登録なのかもしれない。身近な研究仲間の多くは、豊かな風景と戯れる遊びが活動の根底にあるように思う。だから皆、楽観的である。しかし、自分というものへの不安を抱え、なにかを必死につかもうとする中で、その対象を風景に求めている人もいるであろう。その人たちの風景論は、どこかちがった様相を帯びるのだろうか。

一方、風景と私の関係に、因果関係を持ち込むことはあまり適切ではないように思う。それは、絶望的な風景の中で日常が破たんした生活を送る人々を描きながらも、そこには明るさと希望が漂う作品もあるからだ。たとえば、小説でいえば奥田英郎の「無理」、映画でいえば富田克也監督の「国道 20 号線」や「サウダーヂ」である。

そしてまた、文字通りあらゆる日常の、私の、みんなの風景が消失した東日本大震災の被災地。その風景の問題に対する答えの模索は、あまりに複雑である。

このような風景を考える不安と困難から目を背けるために、説明しやすく目に鮮やかな、「とりあえずの風景」に飛びつくことだけは避けなければならない。そうした力を育てるためにも、「私の風景の日常性」をもう少しばらく考えていきたい。

本研究は JSPS 科研費 23360229 の助成を受けたものである。

補注

- (1) なおベルクは文献 9)において、風景の出現を見分けるための基準として 5 項目を挙げて(p. 50), これに照らして風景の出現の度合いを考えられることを示している。
- (2) 中村良夫研究室における風景現象の記述研究において社会の変容を強く意識したモデルの初期のものとして文献 11)があり、そこでは定住が基本であった時代に対して日常的に多くの地域を移動する主体に対する風景認識に着目している。
- (3) これははっきりとした記憶とは言えないが、思いだそうとすれば思いだせるものという意味で中井久夫のいうメタ記憶¹²⁾と呼ぶことも考えた。しかしできるだけシンプルにするためにここでは記憶と呼んだ。
- (4) 篠原による景観分類のなかでその定義がつかみづらいものに「場の景観」があるが、これはこの地域景観イメージの一種であると考えられる。場と呼ばれるひとまとまりの領域の広さは地域よりも遥かに小さく、ケビン・リンチによる district に近いと考えられるが、ある面的広がりでの景観認識のプロセスとしては本稿の提示するモデルを適用してとらえることができると考える。
- (5) 主体が属する地域以外での行動の経験や行動に基づかないメディア等を通して得た情報や知識は、当然この一連のプロセスに影響を及ぼすが、それは自明なことなので省略した。
- (6) 沢田のこの指摘は生活景の議論においても示唆的である。
- (7) なおそこで沢田は、動物と環境の関係(動物行動学)や人間が環境を道具として利用する合目的行動といった見方を論の柱の一つにしている。環境との身体的、直接的関係が激減した現代において風景の、それも安定した風景のことを考えようとするならば、そういう意味でも沢田の描く環境の風景像は参照されてよい。
- (8) 例えば、いまやほとんどの人が評価する田んぼの風景に対して、それがどのような地域体験記憶の連関をもつかは、大きく違いがあるだろう。たとえば私の場合には、今も住まう谷戸に小さな田んぼが残っていてホテルがいたような 5, 6 歳以下のおぼろな記憶に始まり、引っ越した先の九州では稲を育てる場としての田んぼが周囲にあり、青田から黄金までの色の変化、水路をちろちろと流れる水の様子、田植え、田起し、さらには肥料となるレンゲが一面に咲いていた様子(そしてある日それが無惨に耕耘機で踏みつぶされて土に混ぜられたときの驚き)、までが、私の中にはながめのストックとしてある。しかしこのことは今初めて思い出されたのである。同じ田んぼの風景を眺めていても、「そうした稲の育成の場でありその産物としての米を研いで炊いて食べるご飯を日常

の食事の基本として育った私」と「田んぼは見たことがあっても、なんか見たことあるくらいの学生」とでは、田んぼという風景が生成される体験記憶のストック状況がまるで異なることが想像される。仮にそうであれば学生がきれいだと賞賛する田んぼの風景は、体験記憶の支えのない、同時に稲作という環境の中で営まれる人間の統合的行為との関係の希薄な、画像的刺激によって登録された風景なのかもしれない。風景と日常の食事の連関も弱いだらう。たとえばそういったことを考えながら、語られた地域の景観資源を吟味する必要がある。問題はその手法である。

参考文献

- 1) 森信秀一朗・荒井歩：埼玉県八潮市における景観変遷と住民の景観認識に関する研究，ランドスケープ研究 73(5), pp. 755-758, 2004
- 2) 佐々木葉：地域景観の議論のためのメモランダム，土木学会景観・デザイン研究講演集 No. 7, 2011
- 3) 篠原修：景観体験と景観の操作，土木工学体系 13, 景観論，彰国社，p50, 1977
- 4) 木岡伸夫：風景の論理- 沈黙から語りへ，世界思想社，2007 なお風景の段階的概念は安彦一恵・佐藤康邦編：風景の哲学，ナカニシヤ出版 2002, pp37-56「沈黙と語りのあいだ」に既に提示されおり，エッセンスだけをつかむにはこの短い論考の方が読みやすい。
- 5) 沢田允茂：認識の風景，岩波書店，1975
- 6) 吉村晶子：原風景の生成に関する研究，造園学会，ランドスケープ研究 67(5), pp. 731-736, 2004
- 7) 吉村晶子：風景/景観に関する言説にみる景観概念，風景体験類型及び説明モデルに関する研究，土木学会景観・デザイン研究講演集 No. 3, 2007
- 8) オギュスタン・ベルク：日本の風景・西欧の景観—そして造形の時代，講談社現代新書，1990
- 9) オギュスタン・ベルク：風景という知—近代のパラダイムを超えて，世界思想社，2011
- 10) 佐々木葉：風景のクオリアと言葉，土木学会景観・デザイン研究講演集 No. 3, 2007
- 11) 小澤晶子・仲間浩一・中村良夫：景観体験の変容に対する原論的研究，日本建築学会大会学術講演梗概集，pp. 273-274, 1995
- 12) 中井久夫：兆候・記憶・外傷，みすず書房，2004 収録「発達の記憶論—外傷性記憶の位置づけを考えつつ」pp. 38-79
- 13) 奥田英郎：無理，文藝春秋，2009
- 14) 富田克也監督・空族制作：映画・国道 20 号線，2007
- 15) 富田克也監督・空族制作：映画・サウダージ，2011